

# オーストラリアにおける韓国人移民の言語レパートリーと言語管理 Linguistic Repertoire and Language Management of Korean Immigrants in Australia

高 民定(千葉大学)

Minjeong KO (Chiba University)

## Abstract

This report attempts to find out how the linguistic repertoire of people in the move usually regarded to as migrant is formed. On the basis of an interview survey with migrants of Korean in Australia, this study focuses on the narratives related to one's self-evaluation towards his/her ability in English as the host language of the society. The data was collected through a language biography interview, from which synchronic and diachronic narratives in the immigrants' reports were abstracted for analysis. The findings suggest that as a clue for the understanding of immigrants' language acquisition problem, migrants' evaluation and the diachronic perspective of their language biography should be taken into consideration. And also my study showed similar results to Muraoka(2017) of finding, for example, one's overall positive evaluation and negative evaluation is encompassed with the trajectory of diachronic language management upon his/her arrival in Australia. The findings also indicate that other-evaluation gained through participation in social networks, particularly narratives about what kind of identity has resulted are also important components in the repertoire.

## 1. はじめに

グローバル化に伴う人々の国境を越える移動が多様になり、加速化している。外国人居住者、移民などと称される人々のなかには、定住と移動を繰り返しながら暮らす人々も少なくなく、それだけ移動する人々をとりまく社会的、言語的環境は複雑化し多様化も加速化している。とくに、オーストラリアのようにこれまで多様な移民を受け入れてきた社会における移民言語への関心は、コミュニティ言語の多様性から個々の移民の多様な言語背景をとらえるほうに変わってきている(ファン2016)。個々の移民のもつ言語レパートリー研究(e.g. Blommaert 2010)への注目はまさにこうした現在の移民言語研究の流れを反映している。また多様な移民の言語レパートリーの実態とともに、それをめぐる言語管理に注目することも移動する人々の新たな言語研究の課題を考える上で重要なヒントになると考える。

オーストラリアにおける移民の人口は年々増加しており、オーストラリア統計庁の2015年の調査<sup>i)</sup>によるとオーストラリアの推定居住人口の28.5%は海外生まれの人であり、その人口は2014年よりも3.0%増加している。韓国からの移民も年々増加し、同統計庁が2016年に発表した人口調査によると、韓国語使用者は108,997で、5年前の統計調査と比べると、26.7%も増加している。韓国人のオーストラリアへの移民は1970年代から始まっており、1973年から1976年にかけて小規模の技術移民が入っていった。80年代から90年代にかけては「投資移民」や「家族移民」として移住している。ただし、ヨーロッパ系の移民や中国系、ベトナム系移民に比べると、韓国系移民はその歴史は比較的に新しく、移民の規模もまだ少規模に止まっていると言える。そのため、オーストラリアにおける韓国人移民に関する研究もまだ少ない。<sup>ii)</sup>とくに、韓国人移民の言語習得や言語問題に関する調査研究はほとんどなく、ホスト社会への参加とその関わりについてもほとんど取り上げられていない。移民のホスト社会への参加にはコミュニティ言語や個人の言語レパートリー

が重要な要素として考えられるだけに、韓国人移民の言語環境や言語使用に対する意思と管理を捉えることは重要であると言えよう。そこで、本研究はオーストラリアにおける韓国人移民の言語レパートリーとそれをめぐる言語管理 (Jermudd and Nestupny(1987)) を明らかにすることを目的とする。具体的には移住の背景やホスト社会での言語習得、現在の英語を含む言語使用に対する自己評価を調べる。と同時に、彼らのホスト社会でのネットワーク作りや日常生活におけるインターアクション管理を通時的・共時的な視点から分析する。それにより韓国人移民の当事者の自己評価に基づく通時的、また共時的な言語管理が彼らのホスト社会での独自の言語レパートリーの形成にどのように影響しているかを考察する。

## 2. 研究の背景

### 2.1 オーストラリアにおける韓国人移民の概要

2000年代に入ると留学による移住が増えるが、それにより若い世代の移民が増え、2001年のオーストラリアの統計によると、韓国人移民の平均年齢は30.8才で、ほかの移民の平均年齢が46歳であることと比べると、移民コミュニティの年齢層は非常に若いことが分かる。また韓国人移民の大半はニューサウスウェールズ(NSW)州に居住しており、2011年の調査では韓国人移民のNSWの居住率は80%にも達している。その後は他の地域に分散する傾向が強くなっている。

オーストラリアにおいて使用される言語は400以上あると言われているが、韓国語は第11位となっている。최은수(チェウンス)(1996)によると、韓国人移民は集団を形成して暮らす傾向が強く、韓国人コミュニティの支援が移民の生活の適応に与える影響も大きいという。また、ヒスパニア系移民が社会的サポートと心理的苦渋には相関関係がみられないのに対し、韓国人移民の場合は移民ホスト社会での地位が上がれば上がるほど心理的な負担が軽くなるという(오성희・박기환(オソンヒ・パクキファン)(2007:57)). Gyunsook, Jane, Lee(2014)によると、とくに、韓国人移民女性の場合、ホスト社会での就職ができるほどの英語能力を所持しているにもかかわらず自分たちの英語能力を低く評価し、求職する勇気がなく自ら就職できる機会を制限してしまっているという。以上の韓国人移民の概要からは韓国人移民の社会的ネットワークへの参加の意識や英語能力に関する自己評価の様子がうかがえる。

### 2.1 言語レパートリー

言語レパートリー(linguistic repertoires)は、エスノグラフィー研究により言語コミュニティの研究のために提案された概念で、あるコミュニティのメンバーがもつ言語リソースを指すとしている(Gumperz&Hymes1972)。言語人類学では、特定の個人が習得した言語変種の総体であるとしており、個人の所有する言語変種の数や特質は、その個人のもつ社会的アイデンティティや地位、人々との交流にも影響する。Blommaert and Backus(2013)は、言語レパートリーについて、「indexical biographies(指標的バイオグラフィー)であり、つまり個々人が辿ってきた軌道を示すとしている。また言語レパートリーの分析は、その言語リソースを使う「コミュニティ」に注目するより、個人のもつ言語リソース、すなわち個人の主観性(subjectivities)を探るためのものであり、とくに、現代移民のことばを理解するためには、言語レパートリーの多様性を捉える必要があると主張している。

一方、移民の言語習得や言語使用をホスト社会との関係から捉え、移民の言語習得がアイデンティティ構築にどのように関わっているかに注目する研究もある(e. g. Norton 2000;Berry 1997)。村岡(2010)は移民の言語レパートリーを接触場面における言語管理の蓄積、つまり通時的な言語管理の軌道と呼んでおり、移民の言語レパートリーを分析する手がかりとして、移民のホスト社会の言語能力や言語使用に対する自己評価とともに、社会的ネットワークへの参加に注目している。移民の言語使用に対する自己評価の多様性は、通時的

な言語管理の軌道と社会的ネットワークへの参加によって説明できるとしている。また社会的ネットワーク参加においては、移民が所持している言語資本が重要な資源となっていることを指摘している。Muraoka, Fan and Ko(2013)も移民の言語レパートリーは、移民自身の言語管理の蓄積によって形成された結果であるとし、それには当事者の言語能力や言語使用に対する自己評価が影響していることを指摘している。したがって、移民の言語習得や言語使用に対する自己評価に基づく通時的管理を調べることは、今後の移民の言語レパートリーの形成の方向性を考える上で重要なヒントになると考えられる(村岡 2017)。

## 2. 2 国内外の移民の言語レパートリーと通時的管理

日本における移民の通時的言語管理を調べた研究には 今(2012)や高(2016)などがある。今(2012)はある一人の韓国人女性に焦点をあて、言語バイオグラフィー(Nekvapil2003) を使用し、現在の彼女の言語使用に至るまでの軌道を探ることで接触場面や日本語使用に対する方針やその形成過程を明らかにしている。とくに、調査協力者の日本語の習得や日本語使用に対する意識と方針は、人生の転機をなす出来事、いわゆるエピソード(テンジン 1992)とともに形成され、また変化していることが分かった。またその変化の通時的管理に注目することが接触場面に参加する際の習慣化された言語に対する行動、つまり「接触場面向かう管理」(村岡 2010)を考察する上で重要であることを指摘している。

高(2016)も同じく言語バイオグラフィー調査を使い、日本の外国人居住者の日本語使用を含む言語使用意識と日本語習得に対する評価を、通時的、また共時的な視点から分析・考察している。とくに、外国人居住者の移住前と移住後の異なる言語環境に注目し、その言語環境や言語使用パターン、すなわち、言語習慣による日本語使用に対する意識と自己評価、また意識の変容の方向性を探っている。その結果、出身地の言語と移住後の日本語を主として使用する居住者の場合、最初の日本語の習得のときから一貫して日本語の規範意識(例えば、日本人の日本語使用に常に近づきたい)が強く、自身の日本語使用に対する自己評価も否定的な傾向にあることが分かった。それに対し、出身地においてすでに2言語以上の多言語使用者で、日本への移住後も日本語を含む多言語使用者になっている居住者の場合は、滞在期間が長くなり、習得が一定の段階に進むと、日本語の習得に対する規範意識が弱くなり、自分なりの日本語使用でいいという意識と方針に変わる傾向にあることが分かった。またそれによって、現在の日本語使用に対する自己評価も肯定的な傾向に変わり、今後の習得に対する目標も現在の習得状態を維持する方向に変化していることも分かった。

一方、村岡・倉田(2017)は、同じく言語管理の視点を取り入れながら、通時的管理からオーストラリアにおける日本人移民の言語レパートリーを調べている。具体的にはホスト社会の主流言語の言語能力について移民はどのような自己評価を語り、それがどのように接触場面の管理の蓄積や社会的ネットワークへの参加に影響しているかを論じている。その際3つの分析の視点を取り上げている。一つは、言語レパートリーの多様性がどのように作り上げられているかに注目することである。それは移民が様々な言語リソースをどのように蓄積し、管理してきたか、つまり通時的な管理の軌道を見ることであるという。二つ目は、ホスト社会の主流言語に対する言語能力の自己評価があげられる。それは移民の言語レパートリーを作り上げる言語リソースの蓄積と管理を捉えるには、移民自身がホスト社会の主流言語を含む言語能力をどのように評価するかが重要で、その自己評価の語りに現れる言語習得や言語使用に関する移民自身の原則や戦略に注目することが必要であるという指摘である。三つ目は社会的ネットワークへの参加とアイデンティティが挙げられる。つまり、社会的ネットワークへの参加をどのように理解し、構築しているか、またその際、どのようなアイデンティティを獲得し、他者から承認されているかに注目することである。その結果、自己評価に関しては、肯定的な評価と否定的な評価の語りが示されたものの、どちらが優勢かの判断は何を基準に

するかによって多様であると指摘している。ただし、肯定的な評価をした調査協力者の中からは、接触場面のインターアクションの様々な経験から自身の言語習得や使用に対する原則(方針)が語られることが多く、通時的言語管理が見られるとしている。また村岡(2017)は社会的ネットワークへの参加に関しては、日本語能力の自己評価は調査協力者の社会との関係の理解とほぼ一致しているとしており、ここではホスト社会によって押し付けられるアイデンティティが自己評価の一部を構成しているとしている。それに対し、多文化社会の成熟度が高いとされるオーストラリアの日本人居住者の調査では、バイリンガル能力や仕事上の文化資本によって望ましいアイデンティティの構築が可能になっており、社会的ネットワークへの参加の違いが影響しているとしている。

本研究では、上記の村岡・倉田(2017)と村岡(2017)で使用した視点を援用し、オーストラリアにおける韓国移民の英語習得をめぐる意識や、韓国移民の英語能力に対する自己評価の語りから、彼らの通時的な言語管理を考察する。さらに、韓国移民の通時的な管理がホスト社会のネットワークへの参加やそこでのインターアクション管理とどのような関係にあるかを分析・考察する。

### 3. 本研究の調査概要と分析の枠組み

#### 3. 1 調査の概要

本研究におけるデータは言語バイオグラフィー・インタビュー (Nekvapil2003)とインターアクション・インタビュー (村岡 2002) の2種類のインタビューによって収集した。言語バイオグラフィー・インタビューは、移住の目的は移住前と後の言語学習歴を自由に語ってもらったもので、本調査では、とくに移住後のホスト社会での言語習得をはじめ、ネットワーク参加、接触場面のインターアクションの経験やそこでの様々な言語問題と言語管理の歴史を語ってもらった。また言語バイオグラフィー・インタビューでは、語りを事実レベルと主観的レベル、テキストレベルの3つのレベルから取り上げており、本研究では、主に事実レベルと主観的な事柄に対する語りを中心に分析を行う。

インターアクション・インタビューでは現在のインターアクション管理を中心に、最近ネットワークづくりや接触場面の参加においてどのような言語使用があり、それに対してはどのような留意や評価、また調整があったかを聞き取る。調査は2015年2月と2017年2月にメルボルンに居住する韓国移民を対象にそれぞれ行われた。

#### 3. 2 調査協力者

今回調査協力者となった韓国移民は8人で、全員滞在歴が5年以上となる長期移民者である。うち、4人(KR5-KR8)はオーストラリアに移住する前に留学や仕事、また家族滞在などの目的で他の地域(国)に1年以上滞在した経験がある人である。前回の移住先のホスト言語も習得しており、英語を含む多言語使用者である。調査協力者のプロフィールと、移住の経路、言語環境を以下に要約する。なお、協力者の記号のうち、KRは韓国人を表す略号で、次のSとMはオーストラリアへの移住前の他地域での居住の経験を表す略号である。つまり、Sはオーストラリア以外に移住の経験がない移民のことを、Mは移住の経験がすでにある移民を指している。

KR15 : 女性, 50代後半, ソウル出身. 2007年に移住, 2015年調査時で滞在歴8年, 最初の1年は語学スクールに通い, その後, オーストラリアに定住するため, 美容専門学校に2年間通いながら永住ビザを取得する. 移住前の出身地でも美容師として10年間働いた経験がある. オーストラリアでは美容学校のファストトラックコースに通いながら, バーバーショップで美容師として働き, 主に仕事

先でローカルな人と話すことで英語を習得してきた。移住3年後には現地のオーストラリア人と結婚し、2人暮らし。現在は自分のヘアショップを運営。使用言語は韓国語と英語。家庭と仕事先では主に英語を使用。

**KR2S** : 女性, 30 前半, ソウル出身。2006 年に移住, 2015 年調査時で滞在歴 10 年, 最初の半年は語学スクールに通い, その後, 美容学校に 2 年間通う。卒業後は美容経験を積むために, 半年間韓国に一時帰国。2008 年に再度渡豪し, ヘアショップで働き, 現在に至る。オーストラリアで出会った同国人と結婚し, 現在は子供と 3 人暮らし。使用言語は韓国語と英語で, 家庭では韓国語のみを使用, 仕事先では主に英語使用。

**KR3S** : 女性, 30 代前半, 京畿道出身, 2010 年ワーキングホリデーで来豪し, 1 年滞在し帰国。2012 年オーストラリアで出会った同国人と結婚し, 再度渡豪, 調査時で滞在歴 5 年, 夫と 2 人暮らし。結婚後は 1 年間現地の大学にも通ったが, 中退し, 現在は専業主婦。使用言語は韓国語と英語, 家庭では主に韓国語使用。

**KR4S** : 女性, 40 代半ば, ソウル出身, 韓国人夫の仕事の関係で 2010 年に初渡豪し 1 年間暮らし, 仕事の関係で帰国, 2012 年再度渡豪し, そのまま定住する。調査時で滞在歴は 5 年, 現在は子供と 3 人暮らし。韓国では銀行員として働き, 現在は専業主婦だが, 週 3 回ボランティア活動もする。使用言語は韓国語と英語, 英語は主に高校と大学で学習し, 現地の語学スクールは通っていない。家庭では主に韓国語を使用, 時々英語も使用。

**KR5M** : 男性, 40 代半ば, ソウル出身, 2009 年仕事関係で移住, 調査時で滞在歴は 8 年, オーストラリアに移住する前は日本でも仕事の関係で 3 年半滞在, 日本語も習得している。IT 関係の多国籍企業で働き, 国内外の出張で移動が多い。同国人妻と子供との 3 人暮らし。使用言語は韓国語と英語で, 英語は大学と仕事関係の移住先で習得しており, 家庭では主に韓国語で, 仕事先では英語のみ。

**KR6M** : 女性, 30 代前半, ソウル出身, 2007 年に大学入学のために渡豪, 調査時で滞在歴約 10 年, 移住して最初の半年間は語学スクールに通い, その後, 大学で 4 年間看護学を専攻し, 現在は病院の看護師。オーストラリアで出会った中国人移民と結婚し, 2 人暮らし。オーストラリアに移住する前はロシアに 1 年間留学しロシア語を習得。そのほか高校のときから日本語も独学で習得。現在の使用言語は韓国語と英語と日本語, ロシア語, 家庭や仕事先での主な使用言語は英語, 日本語は時々周りの日本人と交流するときに使用。

**KR7M** : 女性, 20 代後半, プサン出身, 2012 年移住, 調査時で滞在歴 5 年, オーストラリアに移住前は日本にも留学で約 3 年間滞在し, 日本語も習得。大学では美術を専攻し, 現在は子育てのため, 休職中。休職前はギャラリーや, アフタースクールのクラスで子供に美術を教える教育マネージャー。オーストラリア人と結婚し, 現在は子供と 3 人暮らし。使用言語は韓国語, 英語, 日本語, 家庭では韓国語と英語, 子供のために通うスクールでは英語のみ。

**KR8M** : 女性, 40 代後半, ソウル出身, 2009 年に韓国人夫の留学と一緒に移住し, 4 年間滞在。2013 年に夫の仕事の関係で中国に移住し, 2 年間過ごす。中国現地では 3 ヶ月くらい語学学校で中国語を学ぶ。その後, 2015 年に再び, オーストラリアに移住し, 現在に至る。調査時でのオーストラリアの滞在歴は合計で 6 年。現在, 専業主婦で, 子供と 3 人暮らし。英語の学習は高校や大学で勉強したくらいで, 最初の移住では英語学校には通っていなかったが, 再渡豪してからは英語学校に通い, 本格的に英語学習を始める。使用言語は韓国語と英語, 中国語は挨拶や簡単な会話程度。家庭では主に韓国語, 教会活動では英語と韓国語を使用。

### 3. 3 分析の枠組み

本研究はオーストラリアにおける韓国人移民の言語レパートリーをめぐる言語管理を明らかにすることを目的とする。具体的には日本やオーストラリアにおける移民の言語レパートリーを調べた村岡・倉田(2017)、村岡(2017)の視点や分析の枠組みを援用し、移住の背景や英語の習得の過程、現在の英語能力に対する自己評価を調べるとともに、そこで語られる移民の通時的管理がホスト社会での社会的ネットワークの参加にどのように影響しているかを分析・考察する。とくに、韓国人移民の中には来豪前にすでに他の地域や国への移住の経験がある人も少なくない。本研究では、こうした調査協力者の来豪前の移住の経験の有無がオーストラリアでの韓国人移民の言語レパートリーの形成や通時的な言語管理にどのように影響しているかにも注目する。

#### 3. 3. 1 自己評価の語りの分類と基準

従来の外国人居住者の言語習得や言語使用の自己評価に関する研究は、語りの文脈から単純に肯定的評価と否定的評価に分ける分析だけに止まることが多かった。しかし、村岡(2017:67)は自己評価の語りは、その種類と分類基準に分けて分析できるとしている。本研究では村岡(2017)の次の自己評価の種類と基準の分類に従い、韓国人移民の自己評価の語りを分類する。

##### (1) 自己評価の語りの3種類

- (a) 総合的な習得と学習経験の語り、または総合的な評価の語り
- (b) 他者評価を基にした評価の語り
- (c) 特定のインターアクション時の問題を基にした当事者評価(高 2013)の語り

##### (2) 自己評価の基準

- (i) 英語学習に対する投資が結果に見合っているかどうか(以下、「投資」)
- (ii) 特定のインターアクションで期待された規範に逸脱していないか(以下「規範からの逸脱」)
- (iii) 特定のインターアクションで期待した目的が達成されているか(以下「目的達成」)

#### 3. 3. 2 (通時的視点からみる) 自己評価の変化と、当事者評価との関係

言語習得や能力に対する移民の自己評価は、移住の経験が蓄積されたり、定住の期間が長くなるにつれ、移住当初とは違う評価へと変わることがある。本研究では移住の経験の有無と通時的な管理の語りから英語習得や英語使用に対する自己評価がどのように変化しているかにも注目する。また自己評価と当事者評価の関係については、村岡(2017)では自己評価の種類の一つとして当事者評価をみており、移民の接触場面向かう管理は当事者の評価とその構築を通して作られると指摘している。しかし、両者の関係は必ずしも明確には述べられていない。本研究では、当事者評価はインターアクションに対する当事者の内省であるととらえる。それに対し、自己評価は当事者評価の蓄積の過程がインタビュアーとの相互行為を通して表出される評価で、いわゆる当事者評価のメタ的語りであるととらえる。本研究ではこうした当事者評価、自己評価、接触場面向かう管理、通時的管理の関係を総合的にとらえながら、分析を進めていく。

#### 3. 3. 3 英語能力の自己評価と社会的ネットワークへの参加

移民のホスト社会の主流言語に対する能力が移民のそのホスト社会への関わりや位置付けに影響していることは、すでに先行研究により指摘されている。村岡(2016:74)によると、自己評価が肯定的な場合は周りに承認されていることが語られ、否定的な場合には人との隔たりが示されていると述べている。本稿も言語

能力の自己評価とホスト社会の社会的ネットワークへの参加が相互に影響し合うことを認めながら、さらに通時的な視点から移民の英語能力の自己評価と社会的ネットワークへの参加の関係を探る。

## 4. 分析結果

事例分析では紙面の関係上、移住の経験がない移民の事例とある移民の事例をそれぞれ2名ずつ取り上げ、詳しく見ていく。また分析の事例として取り上げられなかった調査協力者に関しては4.1.1と4.1.2のそれぞれのまとめのところで分析を加える。

### 4.1 移住の経験がない韓国人移民の自己評価と言語管理

#### 4.1.1 KR1S の場合

##### (1)英語能力や英語使用に対する自己評価の種類

KR1Sの英語能力や使用に対する自己評価は、肯定的な評価の語りが4件、否定的な評価の語りも4件あった。さらに肯定でも否定でもない「中立評価」と、あえて評価をしないという「評価回避」がそれぞれ語りの中から1件ずつみられた。まず肯定的な評価では、過去と現在の英語能力に対する「総体的評価」が1件ずつあり、また「他者評価」による自己評価も2件あったが、その「他者評価」の場合、結果としてKR1Sの英語能力に対する否定的な評価を肯定的な評価に変えるきっかけとなっている。例えば、KR1Sは7年前最初に移住してきたときの英語の問題について語っている場面で、最初は英語があまりできなくて、お客さんが言っていることがよく理解できなかったという。お客さんに質問されると、ただ「I'm sorry あるいはah okay, okay」と答えていたという。しかし、こうした自分の英語能力についてKR1S自身は、「でもその時は、あまり気にしなかった」と、当時は自身の英語の問題を否定的に評価していなかったことを話している。また自身の英語能力について指摘されると、次のように言い返したという。「お客さんに言われると、how can I English propulsion language. my situation very difficult for you. I'm not younger children, そういうとみんな理解してくれた」つまり、自分はもう若くないので英語の習得は難しいと説明している。KR1Sのこのような語りからは、英語能力の問題に対する否定的な評価をできるだけ目立たないようにするという調整をしていた可能性が考えられる。また当時の自分の英語能力の問題を逸脱として留意はするものの、「でもその時は、あまり気にしなかった」と否定的な評価まではしていないことを述べている。さらに、KR1Sは、お客さんや一緒に働いている他の移民に「あなた英語能力、本当に伸びたね」とか「どうして英語がそんなにうまいの」と自分の英語を褒められたことを語り、その他者評価に対しは「それは私が特別にできるというより、あなた達が英語の勉強をしてこなかっただけのこと」と自分の今の英語能力の他者評価を認めつつ、同時に他の移民の英語能力と比較することで独自の評価をしている。そしてKR1Sにとってこうした他者評価は明らかにKR1Sの英語に対する自信と肯定的な自己評価につながっていることが全体の語りの分析からうかがえる。

##### インタビューの断片1

KR1S：(중략) 내가 김 하나 사서 줄게 그래서 내가 미역하나 사서 줘 뭐 1 달러 밖에 안하니까.

그러면 이제 이렇게 친해지는 거지. 아직도 그 손님이 와요. 그러면 이제 그 손님들이 나한테 이래요. 너 영어 진짜 늘었다고. 처음엔 무슨 뜻인지 몰라가지고, 생각을 해보세요

7년전이면 거의 초창기 때인데, 그러면 옆에 있는 사람들이 뭐라고 물어보잖아. 그러면 I'm

sorry 그리고, ah okay, okay 이라고, 그러면 그때에는 난 신경안써. 난 손님들한테 그렇게 얘기했어, how can I English propulsion second language. my situation very difficult for you. I'm not younger children 하면은 거기서 거의 다 이해하고, overseas people 들은 다 똑같아요. 뭐 Europe 사람들도 영어 못해요. China 4-50 년 사람도 영어 못해요. 너 어떻게 그렇게 영어를 잘하냐고. 네가 공부를 안한거지 내가 잘하는게 아니라고.

(中略)私が海苔を買ってあげるよ。それで私が海苔を買ってあげる。1ドルしかしないので、そうやって仲良くなるのよ、そのときのお客さんがいまでも来てくれるのよ、それでそのお客さん達が私にこう言うのよ。“あなた英語能力、本当に伸びたね”，最初は言っている意味が分からなくて、考えてみてください。7年前お店で働き始めたときは、英語がよくできなくて、お客さんに聞かれると、I'm sorryあるいはah okay, okayと言っていたので、でもその時は、あまり気にしなかった、お客さんに言われると、how can I English propulsion language. my situation very difficult for you. I'm not younger childrenと返したし、そういうとみんな理解してくれた。英語の問題は自分だけではなく、overseas peopleはみんな同じ、Europeも英語があまりできない。China4-50年いても英語はあまりできない。どうして英語がそんなにうまいのと言われることがあるが、それは私が特別にできるというより、あなた達が英語の勉強をしてこなかっただけのこと。)

一方、否定的評価には「総体的評価」と「当事者評価」がそれぞれ2件語られている。たとえば、次の断片2の語りでの評価がその一つである。断片2は渡豪直後のKRISの英語学習について語っているところを出てきたもので、英語のリスニングに対する総体的な否定的評価が見られる。そのとき評価の基準となっているのは、英語学習に対する「投資」である。つまり、KRIS自身は英語の勉強のために仕事もせず、英語の勉強だけに時間を費やし、リスニングのためには毎日ラジオを聴き、イヤホンを付けたまま寝るくらい英語学習をしていたという。それにもかかわらず、英語能力が思うように伸びなかったことに対し、否定的な評価をしていると言える。

#### インタビューの断片2

KRIS : (중략) 리스닝이 난 너무 어려운거야. 너무너무 어려운거야 그리고 프레젠테이션 그래서 이어폰 끼고 앰피쓰리 달고 다니고 선생님들 (수업)레코딩한거 켜놓고, 아침에 뉴스 레코딩하고 집에서 학교 가는데 걸어서 20분 걸려 뉴스 들으면서, 원지도 몰라 그냥 들으면서 끼고 그냥 자고, 그래서 여기 귀가 잘 안들려 이쪽은, 이어폰을 끼고 그냥 눈물나도록 공부했던 거 같아.

(中略)私はリスニングがとてとても難しく、またプレゼンテーションも。それでイヤホンをいつも着けたままで、先生の授業を録音したのも着けばなしで、朝はいつもニュースを聞きながら学校に行っていた。)

さらに、KRISは現在の英語使用の問題に対しては、村岡(2017)の評価の種類にはない肯定でも否定でもない評価を回避する語りも見られる。例えば、次の断片3は、KRISが過去に自分の店にきていた客に自身の英語の問題で怒られた経験を語っている。そのときKRISは誤解を与えてしまった自分の言語能力を逸脱として留意するものの、それはあくまで言葉の伝え方の問題であって、自分のとった行動は間違っておらず、ただ誤解されているだけだと思っていたという。つまり相手が怒り出す理由となったインターアクションに対して、KRIS自身はとくに否定的な評価はせず、むしろ、そもそも英語がうまくないことを分かっている

がら、自分のお店に来ていたお客さんが間違っていると評価したり、いつかは自分が間違っていないことを分かってくれるはずだと、自分のインターアクションの問題への評価をあえて避けていたことが分かる。

### インタビューの断片 3

KRIS : (중략) 리고 내가영어를 못알아들으면 손님이 화를내 근데 내가 그 화를 설명하려고 하는데 그 기회조차 안주는 손님들이 있어요. 돈이면 다되는줄 아나봐. 그 태인애들은 언젠가는 내마음을 알아주겠지. 영어가 미흡하다는걸. 그걸 오해해가지고 다시와서 따지는 사람들도 있었어요. 그래서 아니라고, 아니라고 해봤자 변명이되니까 그냥 웃고. trust me. 그냥 그러고 말아요.

((中略)それで、私が英語を聞き取れないと、お客さんが怒り出し、私が説明しようとしてもその機会もくれないお客さんもいる。お金さえあれば全部できると思っている。単に英語能力がまだ足りなくて起きたミスなのにそれを誤解して私に問いただすお客さんもいる。私が違いますと言ってもそれは言い訳にしか取られないので、私はただ笑いながら、trust me. というしかない。)

## (2) 現在の英語能力の自己評価と通時的管理に見られるコミュニケーションの原則

KRIS は、ヘアショップを始めてから自分が直接業者とやりとりしなければならないことが増えたという。最初は次の断片 4 の語りのように通訳ヘルパーを使い、やり取りの調整をやってもらったが、通訳ヘルパーを通してやりとりするのはなかなか大変で、今は自分で直接業者さんとやりとりをしているという。そうすると、相手からは英語がうまいのにどうして通訳ヘルパーを通していかと言われることもあるという。また今は言いたいことだけシンプルに話せば、コミュニケーションは問題ないと自信がもてるようになったことも語っている。さらに KRIS は、このように自分の英語能力を肯定的に評価できるようになったのは、3 年ほど前からで、2007 年にきてここまで出来るようになった自身の英語能力を肯定的に評価している。さらに KRIS は円滑なコミュニケーションのために「英語で話す時は言いたいことだけシンプルに話す」というコミュニケーションの原則を使っていることや、また相手に誤解されないように最初から自分は英語の第二言語話者であることをアピールしていることも語っており、このようなコミュニケーションの原則と事前調整は他者評価がきっかけとなった通時的管理の結果であると言えよう。

### インタビューの断片 4

KRIS : (중략) 내가거의 다하고 몇번을 다시 확인하지. 그리고 이메일로 달라고하고. 그다음에 카운시에나 수도 끝난다 이사한다 이런거 notice 해야하잖아요? 그런것도 처음에는 영어를 모르니까, 어떻게 해야할지 사람들한테 다 물어보고, 어떨 때에는 통역관 통해서 한적도 있고, 그런데 통역관 통하니까 더힘든거야. 그래서 내가 다이렉트로 이야기하니까, 너 영어 잘하는데 왜 통역관 통했느냐 이런적도있고. 그런데 지금은 뭐 내가 할 이야기 심플하게만 하면, 지금은 거의 자신감이 생겨서. 월해도이젠 다할수있을것같애. 지금 보면 2007 년도에 와서 지금 이정도면 정말 대단한거같애.

((中略)私がやります。ほぼ私がやって何度も確かめますね。そして、メールでも送ってもらって。その次、区役所とか電気を止めるとか、引っ越すとか notice するんですよね?そういうのも最初は英語が分からないから、どう話すのか人々にきいて、あるときは通訳者を通したともあって、しかし、通訳者を通したこともっと大変でした。それで、私からダイレクトで話したら、あなた、英語で

るのになぜ通訳者を通したんですか?と言われることもあって、しかし、今は私が話したいことをシンプルに伝えれば、今はもう自信ができていて、もう何でもできそう。2007年に来てこのぐらいできるのは本当にすごいと思う。)

### (3) ネットワークの形成とホスト社会の社会的ネットワークへの参加調整

KR1Sは、自分の英語の習得のためにわざと韓国人コミュニティとは距離を置いていたことを語っている。また自分は韓国の情緒と合っていないこと、またここではベストフレンドも他の国の人で、韓国人の知り合いは1、2人しかいないことを語っている。このような語りからはKR1Sが意識的に韓国人コミュニティへの参加を回避する管理をしていたことがうかがえる。

一方、KR1Sは英語の習得のために様々な学習ストラテジーを使用したことも自ら語っている。例えば、KR1Sは店にくるお客さんと会話をするために毎日ニュースをチェックし、話すトピックを決めておいたり、とくに相手が興味をもってくれそうなトピックを前もって調べたり、同じトピックを別の人に何度も繰り返し使うことで、会話の完成度をあげる事前調整をしていたという。KR1Sのこうした一連の事前管理とインターアクション管理の繰り返しは、英語の習得を成功させ、ホスト社会への参加に自信を持たせることにつながっていると考えられる。またそれは結果としてホスト社会における望ましいアイデンティティの形成や強化にもつながっていると見えよう。

#### インタビューの断片5

KR1S：(중략) 두시간씩 하고 그러면 내가 제일 이야기 할 수 있는게 뭐냐. north korea story 그러면 맨날 내가 어떻게 하나면, 인터넷 보면 신문에 north korea 한국어 영어로 나온걸 내가 대충 외워가요. 그리고 한국음식 만드는거 내가 한국음식은 할 줄 아니까 그거 영어로만 뜻 알면 되잖아요. 그러면 어떻게 얘기하지? 애들이 설명해주면 그걸 그대로 copy 하는거야.

((中略)2時間ぐらいして、それで、私をもっとも話しやすいのはなにか。north korea story そうすると、毎日私がどうするかという、インターネットを見れば新聞に north korea 韓国語、英語で書かれた記事をだいたい覚えでくる。そして、韓国料理の作り方。私は、韓国料理はできるから、英語で意味だけ分かればいいんです。そうすると、どう話せばいいかな?周りの人達が説明してくれる。そこでそれを copy する。)

### (4) ホスト社会への評価と今後の自身の目標

KR1Sは移民社会としてのオーストラリアでの生活を聞く質問に対し、「とても優しく、とくにメルボルンはフレンドリーな人が多く、移民に対しても優しい」と評価をする。また今後のホスト社会での目標については「ヘアーショップの運営はある程度軌道に乗って成功しているので、今度は美容機材関係の商売もやってみたい、あるいは韓国に帰り、外国人相手のヘアーショップをオープンするか、英語教師になるためにここで大学進学も考えている。」と語っている。このような語りからKR1Sにとってホスト社会への参加は成功しており、それは次のステップアップのための目標を語っているところからもうかがうことができる。またそれはホスト社会への肯定的な評価にもつながっていると見えよう。

## 4.1.2 KR2S の場合

### (1) 英語能力や英語使用に対する自己評価

KR2S の場合, 自身の英語能力や英語使用に対し, インタビューの中で一度も肯定的な評価は語っていない。自己評価の語りは4件あったが, 4件ともに否定的な評価を語っている。評価の種類としては, (a)英語の習得や過去のインターアクションに対する「総体的評価」3件で, その判断基準となっているのは, (i)の「投資」と, (iii)の「規範からの逸脱」であることが語りの中から読み取ることができる。そのほか, 特定のインターアクションにおいて規範を逸脱したことに対する「当事者評価」が否定的に語られる場合が1件あった。例えば, KR2 は次の断片6のように病院でのインターアクションが苦手で, できるだけ韓国人医師がやっている病院を利用しているが, その病院はいつも待ち時間が長いので, 仕方がなくローカル病院に行っていると語っている。しかし, ローカル病院の医者は移民出身の外国人が多く, 移民英語の独特なアクセントが聞き取れず, 理解できないまま帰ってくることが多いと語っている。

インタビュー断片6:

KR2S: 그런데 만약 그 의사분이 바쁘시면은 외국인 의사한테 가야하는데 그러면 좀. 저도 설명도 잘 못하고

(もし韓国人医師が忙しければ外国人医師の方に行くしかないが, そうなると話をあまり聞き取れず, 説明もうまくできない)

ER: 여기 한국인 의료기관이 있나요?

(ここは韓国人がやっている医療期間はありますか.)

KR2S: 의사분들이 몇분 계세요. 호주 병원안에 한국인 몇분이...그분한테 더 몰리니까 대기 시간이 3-4 시간이렇게 되거든요. 못기다리면 그냥 만나는데 이민자다보니까 그사람들도 그들만의 악센트가 있어서, 알아듣기힘들거든요 저희도. 거의 네네. 하고 나와요 뭐 몰라요.

(何人かいます。オーストラリア病院の中に韓国人が何人。なので, その韓国人医師のところの人にたくさん来て, 待機する時間だけで, 3, 4時間はかかる。待つことができなければ, 外国人医師の方に行くが同じく移民なので, 独特なアクセントがあり, 聞きとりにくい。私たちも, ただ, はいはいして出るけど, 内容はわからない.)

また, KR2S の自己評価の1つは, 過去の英語使用で間違っていたエピソードの語りで見られる。KR2S は過去の英語使用で間違っていたエピソードを語っており, そこに自己評価がみられている。KR2S は, 次の断片7である韓国の単語(「방구 (방귀)」(バンク(意味: オナラ))を英語だと思い込み, しばらく使い続けていて, 後から気が付き, 自分のその英語使用は明らかに英語の規範から逸脱していたことを否定的に評価している。

インタビュー断片7:

KR2S: (중략) 옛날에 살던 쉐어집이 인도애들이 되게 많이 사는 집이었어요 한 스무명 있었어요.

그런데 게네가 내가 처음 왔을 때 영어를 잘 못하니까 막 이것저것 단어를 가르쳐 주다가 한 명이 방구를 권 거예요. 내가 방구 껴었다고 애들한테 말을 하니까, 따라하는 거예요. 방구 껴었다고. 그래서 나는 방구가 영어구나...그래서 그때부터 방구만 방구가 영어인줄 알고 계속 했었거든요. 그런데 알고 보니까 그게 아니더라고요. 게네가 나를 해석해준다고 한건데, 저는 방구란 말을 못 배운거죠. 방구라는 뜻의 영어를.

((中略) 昔に住んでいたシェアハウスにインドの人が20名ほどいたが、私が来たばかりで英語があまりできなかったの、色々教えてくれていたところ、中の人がオナラをした。私はオナラしたなと韓国語で言っていたら、みんなもバングバングと言っていた。それで私はバングは英語だと思い込んで、しばらく使っていた。あとで違うことが分かったが、そのせいで私はオナラの英語を学ぶことができなかった。)

ER: 아아. 방구는 한국말이잖아요.  
(ああ、オナラは韓国語でしょう。)

KR2S: 그러니까, 게네가 방구를 방구라고 자연스럽게 따라 하길래 저는 방구가 영어인줄  
알았어요. 내가 방구가 방구라고 한 2년은 했던 거 같은데.  
(だから、彼らがあまりに自然にバングと言っていたので、疑いもなく英語だと思っていました。  
それも2年も使っていました)

こうしたKR2Sの自身の英語使用に対する自己評価は、自身の英語使用に対し、「英語が完璧ではないので、一度も満足したことがない」という語りや、「我々は絶対ネイティブのように完璧にはならない」という英語に対する意識に影響していると考えられる。一方、KR2Sの否定的な自己評価は、社会的ネットワーク作りや参加において消極的な態度をとることにつながっている様子もうかがえる。その様子についてKR2Sは次のように語っている。

「うちの両側にオーストラリア人が住んでいるが、彼らとはあまり交流がない。オーストラリア人同士は親しくしているが、自分は移民なので、仲間に入ることができない。会っても何を話しているのかよく分からないし、自分が声かけても相手が聞き取れず、もう一度言ってくださいと言われると、一気に自信がなくなるので、交流をだんだん避けてしまう。」

## (2) 英語使用に対する意識と自身のもつアイデンティティの評価

KR2Sは自分らしい英語使用についてどう思うかというERの質問に対し、次のように語っている。「そういう意識は死ぬまでないかも、なぜなら移民であること自体がとても嫌だし、ホスト社会から移民は英語ができないと言われるのは嫌なので、満足することはない」

このような語りからは、KR2Sは自分が移民アイデンティティをもっていることを、否定的に評価している様子うかがえる。KR2Sにとって移民は完璧には英語が話せないという認識が強く、自分らしい英語は、英語の規範から逸脱している言い方で、それを使うことは移民であることを認めることになることと捉えている可能性がある。とくに不十分な英語は自分への不利益に繋がると思っており、ネイティブのように話せないことを認めつつも自分を移民のアイデンティティの所持者として位置付けることは認めたくないという矛盾したアイデンティティがうかがえる。これは村岡(2017)で述べている、いわゆる「抑圧されたアイデンティティ」の形成を表している例であるとも考えられる。

## (3) 習慣化されたインターアクション問題と通時的管理に見られる調整ストラテジー

またKR2Sは自身のインターアクション能力について語っており、会話の話題が限られていて、また自分から会話を開始したり、リードしたりすることは難しいと評価している。こうした評価に見られる問題は移住の初期段階から続いており、現在の自己評価にも影響しているという。さらにKR2Sはこうした問題の調整のためにKR1Sと同様に仕事場ではできるだけ同じトピックを繰り返し話すストラテジーを使っていることを話しており、KR2Sの習慣的で、また通時的管理の一面うかがえる。

#### (4) 自身の社会的位置付けに対する管理とホスト社会への評価

英語能力に対する自己評価は自身のアイデンティティの形成だけではなく、ホスト社会に対する評価にも影響している。KR2SはERの「移民とオーストラリア人のうち、どちらと話すときが楽ですか」という質問に対し、どちらも難しいと評価しており、次のように語っている。

「아..다 똑같은것 같아요. 이민자애들중에 영어 잘 못하는 애들은 갑갑해서 싫고, 호주에서도 말 빨리 하고 억양 센 애들은 대화하기 싫고. (みんな同じです。移民の人たちと会話をしているときは、英語が上手ではないので、コミュニケーションがうまく行かないし、オーストラリア人は早口で、とくにアクセントが強い人とは喋りたくない)」

また同国人とのネットワーク作りや参加に対しては、「남편 때문에, 남편이 사람만나는거 좋아해서 사람을 만나긴 하는데 대신에 우리 떠날 사람은 절대 만나지 말자. 그래서 저희는 저희만의 한인사회에 살아요. 저희같은 처지에 비슷한 나이 또래의 떠나지 않는 사람들. 그러니까 새로운 사람은 거의 없는거 같아요. (夫が人と会うのが好きなので、夫のために韓国人に会ったりするが、彼らはいずれここを離れる人なので、普通は最初から付き合いわないようにしている、なので私たちは我われだけの韓国人社会に住んでいる。同じ状況にいる、同じ年代で、ここを離れない人達だけに限定して付き合う、なので新しい人との交流はほとんどない。)」と話している。

KR2Sは自身の社会的位置付けに対し、移民コミュニティ、ホストコミュニティ、また同国人のコミュニティのどちらのネットワークからも距離をおき、自身を移住社会の中で位置付けることを回避していることがうかがえる。またこうした社会での自身の位置付けは、ホスト社会に対する評価にも影響し、ホスト社会の移民政策を、「점점 안 좋아지죠. 그러니까 정말 영어를 못하는 사람에게는 일할 기회조차 없고, 그러다보니 자기 언어를 쓰는 식당이나 이런데서 노동력 착취고, 시급이 정말 적잖아요.(英語ができない人に対しては仕事する機会すらない、母語を使って仕事ができる場所は労働力を不当に使ってしまう)」と否定的に評価している。

#### (5) まとめ

以上、他の国や地域への移住の経験がなく、オーストラリアへの移住が初めてだったKR1SとKR2Sのホスト社会の主流言語となる英語能力の自己評価の語りを中心に、通時的管理と社会的ネットワークへの参加を捉えてみた。移住の経験がないという同じ背景を共有する二人であるが、移住後の言語環境や英語習得をめぐる管理や自己評価は異なっており、またそれによってホスト社会の社会的ネットワークへの参加の形も異なっていることが分かった。KR1Sの場合は、自己評価が移住直後と現在とで否定的な評価から肯定的な評価に変わっている。それに対しKR2Sは滞在歴が10年になり、ホスト社会で永住者として法的な地位を取得しながらも、英語使用に対しては移住直後と現在とで一貫して総体的な否定的自己評価をしている。つまり、自身の英語には常に限界があると否定的に評価している。そのため、自身の英語使用を常に意識し、インターアクションにおいては同じトピックを繰り返し使用したり、会話への参加に消極的だったりする管理が見られる。またホスト社会から英語ができないことを言われることを極端に嫌っており、移民を不当に扱うホスト社会に対しても否定的な評価が多く、自己評価が社会的ネットワークの参加やそれをめぐる評価にも影響していることが示唆される。

一方で、上記の二人より移住歴が5年ほどで短いKR3SとKR4Sの場合は、様々な評価の語りからホスト社会での言語習得や言語管理に揺れが見られる。KR3Sの場合は、英語能力の総体的な否定的評価をしており、

ホスト社会への社会的ネットワーク参加も移住の直後より消極的になっているとともに、ホスト社会への評価も KR2S に類似する語が見られる。しかし、KR4S の場合は、移住直後は否定的であった自己評価が、ボランティア活動などホスト社会の社会的ネットワークに参加するようになり、様々な接触を通してホスト社会に触れるというインターアクションの目的が達成できていた。それにより言語能力にも自信がもてるようになり、自己評価が肯定的に変わっている。

また KR1S の語りの中には、様々なコミュニケーション・ストラテジーを使っていることも確認されており、そこでは KR1S の様々なインターアクションの失敗とそれを通時的に管理していた様子がうかがえた。もう一つ興味深いのは移住経験のない移民4人とも同国人のコミュニティとは意識的に距離をおいていることである。彼らは民族性よりは個人として、ただオーストラリアの移民の一人であることを強く意識しながらも、他の移民との関わりも積極的に持たず、あくまで「自分」としてホスト社会への参加や位置付けを意識しているようにみえる。オーストラリアにおける韓国人移民は宗教コミュニティや同じ言語コミュニティを中心に暮らす人たちが多くというイメージがあるが、今回調べた移民のケースではそういう傾向は見られず、むしろ、調査協力者は4人とも意識的にそうならないようにネットワークを管理しており、韓国人移民の多様なコミュニティ管理がうかがえた。

## 4.2 移住の経験がある韓国人移民の自己評価と言語管理

### 4.2.1 KR5M の場合

#### (1) 英語能力や英語使用に対する自己評価

KR5M は自身の英語能力の自己評価について、日常生活や仕事には問題ないが、普段使わない話題やスラングなどが出てくると7割しか聞き取れない程度であると評価している。日本でも3年半仕事の関係で居住したことがあり、その時に日本語も習得した経験があるという。日本語能力については、KR5M は「仕事先がグローバル会社だったので、日本でも会社では英語の使用がスタンダードだった。時々お客さんが日本語のレポートを求めるときもあるが、その時は日本語でレポートを作成していた。でも、作成にかかる時間は英語の時の2倍だった。」と語っている。これらの評価の語りからは、KR5M が自身の英語能力をどのように評価しているかを判断することは難しい。KR5M は他の韓国人移民と比べ、自己評価の語りが非常に少ないのが特徴である。自己評価の語りは全体で1件だけである。次の断片8は仕事上のコミュニケーション問題に関する質問しているところで、KR5M は、とくに問題は感じないが、職場の同僚たちと仕事以外の政治やスポーツのことが話題になるとやりとりについていけない時があることを話しており、ここでは、自身の英語習得がある特定分野に偏っているという総体的な評価がうかがえる。この否定的な自己評価には、特定の話題に関するコミュニケーションがうまくいかなかったこと、つまり「規範からの逸脱」が基準となっていると言える。またこうした自己評価が伴われるインターアクション問題に対し、KR5M は下線のようにスポーツや政治に関する社会文化知識を習得しなければと思う一方で、もともと関心がない分野であるため、習得するのがストレスになるので、できるだけ習得を回避していると話している。

インタビュー断片8:

ER: 그래서 그 대화의 주제에 참가하기 위해서 스포츠를 본다거나 하지는 않으세요?

(それで、その会話の話題に参加するためにスポーツを見たりしなかったですか?)

KR5M: 아니요. 그렇게 해보려고 했는데 너무 재미가 없는 거예요. 그리고 정치같은 경우도 보면 한국정치가 오히려 관심이 있고. 제가 사는 곳은 여기지만 그쪽 돌아가는 얘기가 더 관심이

가요. 그래서 제가 아직 호주사람이 아니라고 생각하는 걸지도 모르겠지만 일단 제가 관심이 별로 없는데 대화에 참여하기 위해서 노력을 해야한다는 게 스트레스인 것 같아요. 그래서 그런 부분들에 대해서는 그냥 웅웅웅하게 지나가게 놔둬요.

(いいえ, そうしようとやって見たが, とても面白くなかった. 政治のことも韓国の方が関心が高く, 自分がまだオーストラリア人ではないという意識があるかもしれないが, 一応自分のあまり興味がないトピックなのに会話をしなければならないのでストレスになった. なので, そのようなトピックの時は会話にあまり参加せず, 聞き流すことが多い.)

## (2) 英語の規範と習得における原則

KR5M は自己評価の語りは少ないものの, 英語使用や規範に関する原則のような語りは結構見られた. 例えば, 次の断片9の語りがそうである.

### 原則1: ホスト社会の規範と自分の出身地の規範を使い分けることはしない.

インタビュー断片9:

ER: 아니면 예를 들어서 이럴 때는 현지사회의 규범에 따르고, 이럴 때는 내 나름의 가치관, 자라온 곳의 규범을 따르고 나누어서 생활한다거나

(例えば, 現地の社会規範に従うというか, 価値観や規範を状況に合わせ, 使い分けて生活するか)

KR5M: 그런데 그것을 굳이 저는 나누어진다고 생각을 안 해왔던 이유가 별로 틀리지 않는 것 같아요. 그러니까 어차피 한국이라든지 일본이라든지 여기든지 다 어떤 일반적인 상식 수준에서 크게 않는 그런. 또 요즘은 더 국제사회가 되어서 그런 것들이 이제 좀 표준화된다고 그럴까? 그래서 그런지는 모르겠지만 굳이 그런걸 나눌 정도로 언젠는 제가 어디를 따른다 그런 건 아닌 것 같은데.

(わざわざ分けるという考え方はしないのは, あまり差がないからである. 韓国と日本, こどもみんな常識の範囲からそれほど外れていないので. 最近は国際社会となり, どかも標準化していると思っているのでそうかもしれないが, 分けて考えるほどその違いは感じない.)

上記の断片から KR5M は, 文化間で規範がそれほど違わないと思っており, ホスト社会の規範と自分のベース規範を分けることは考えていないと述べている. ただ, 自分は標準化された規範を使うだけで, どこかの文化や規範に従うという意識はないとしている. こうした KR5M の原則は仕事柄色々なところに移住したり, 居住したりしていた多様な接触経験によって作り上げられたものであると考えられる. またそれは「海外で暮らしていて価値観が変わるというのも考えたことがない.」とか, 「日本で暮らしたときと比べても変わったことはあまりない.」と語っていることから予想できる.

### 原則2: 多様な移民の英語使用のスタイルを認める.

KR5M は, 「工作上, 多様な地域の英語話者と接することが多いので, 英語に関してはとくにどちらの英語規範に従うという意識がない. 最初から多様性を認めた上で英語を使用する. それが標準だと思っている. 例えば, シンガポールの顧客とやりとりするときは, シンガポール人の英語のアクセントは少し強めであることを事前に知った上でコミュニケーションをする. 相手の英語の癖を事前に認知してからやりとりするの

とそうではないのでは、対応がだいぶ違う。」と語っている。このような語りからは、KR5Mの英語使用に対する原則をうかがうことができる。またこの原則もやはりKR5M自身が移住の経験や多様な英語話者との接触を経験する中で通時的な管理によって形成されたものであると考えられる。

### (3) ネットワーク管理とホスト社会への参加

KR5Mは、移住社会で国人コミュニティに参加することを意識的に回避してきたという。また滞在期間が長くなるにつれてホスト社会のネットワークもだんだん狭くなっていると話している。新しいネットワークを広げるより、維持する程度の管理にとどめていると語っている。一方で、自分のホスト社会での社会的立場については、「いくら長く住んでも移民は自分達をオーストラリア人とだと思わない。自分はいくまで移民で、ここは単に定着して住んでいるところに過ぎない」と話している。このようなKR5Mの語りからは、同国人ネットワークとは距離をおきながら、自身を移民の一人として位置付け、現在のホスト社会とのネットワークもできるだけ維持しようとする管理をしていることを示唆していると言える。さらにKR5Mのネットワークや社会的立場に関わる通時的な管理は、「はっきりした知識やファクトをもっていないと、コミュニケーションにはできるだけ参加しない」という語りや、「オーストラリアの英語ネイティブの人だと直接的な言い方をするが、自分はそのような言い方ができない」という語りのようなコミュニケーションの原則や自分のスタイルを作り上げていることもうかがえた。

## 4.2.2 KR8Mの場合

### (1) 英語能力や英語使用に対する自己評価

KR8Mは、4年間オーストラリアに定住した後、中国で2年3ヶ月間滞在し、3年前に再びオーストラリアの定住のため再渡豪した移民である。中国で滞在していたときは、半年ほど中国語を学習したこともあるという。英語についての自己評価4技能ともに低く、とくに話すことはほとんどできないと自己評価している。KR8Mが語った自己評価は、否定的評価が3件と肯定的評価1件である。うち2件は自身の英語習得に対する総体的な評価で、1件は当事者評価によるインターアクションの否定的評価、もう1件は他者評価による肯定的評価である。次の断片10は、総体的な評価が否定的評価となっているときの語りである。

インタビュー断片10:

ER: 본격적으로 공부를 시작하신 계기는 어떻게 되세요?

(本格的に勉強を始めたきっかけは、)

KR8M: 너무 간절했어요. 칠년 넘게 외국생활을 해도 영어를 못하고 있다는 자신이 형편없게 느껴졌고 특히 아이에 대해서. 아이는 다 영어로 된 거로 공부하잖아요. 엄마가 못 알아듣거나 의사소통이 안 되는걸 굉장히 싫어했어요. 학교에서 뭘 얘기했는데 제가 그게 뭐냐? 하면 엄마 그것도 모른다고 하면서 되게 싫어하고 그 다음에 저의 영어 발음이나 그런것도 말이 안되는 발음이다 그러면서. 애랑 계속 껌이 생기는 것 같더라구요. 그것도 있고  
(英語のことがとても切実で、7年も外国で暮らしているのに英語ができない自分がとても情けなく思えた。子供とも英語ではコミュニケーションができないので、子供が学校の話をするときも英語がわからなくて、子供とどんどん距離が生まれていたのです。)

KR8Mは上記の断片10で語っているように自分の英語能力や使用に対する否定的評価をしている。移住して最初の4年間は英語を勉強する機会がなかったという。しかし、中国に移住したときは現地で中国語を

学習する機会があり、その経験から、再渡豪したときはこのままではいけないと思い、英語学校に通いはじめたという。KR8Mは、英語は自分にとってとても切実なことで、7年も外国で暮らしているのに英語ができない自分がとても情けなく思えたという。ここでは海外での生活が長いにもかかわらずそれに見合った結果になっていない、いわゆる「投資」がKR8Mの否定的な評価の基準になっていると言える。

一方、自己評価の中には同じインターアクションの出来事に対し、当事者による肯定的な評価と否定的な評価が同時に見られることもある。例えば、次の断片11で、KR8Mはインターネットショッピングでブランド品を安く売っていたのを見て購入したが、それが偽物だったことがわかり、被害届を出さなければならなかったという。カード会社に返金をしてもらうには本物のブランド品を売っているお店からKR8Mが購入した品は偽物であることのサインが必要だったという。KR8Mはその証明をもらうためにブランドショップの店員さんに説明しなければならなかったが、英語でうまく説明ができず、店員さんが自分の話を聞いてくれなく、とても悔しい思いをしていたという。もし英語ができていたら、簡単にやってくれたことだと思うが、英語ができなかったので、無視された気がして悔しかったと、過去のインターアクションの管理と自己評価を振り返って話している。

ここでの否定的な評価は、偽物であることを証明するサインをもらうという特定のインターアクションの目的が達成できなかったこと、つまり「目的の達成」が基準となっていたと考えられる。しかしKR8Mは自己評価やインターアクション行動をやめず、言いたいことを文章で書きおろしたという。その文章を夫に褒められ、それをカード会社に提出したところで返金してもらうことができたという。このことは結果的に最初のインターアクションの目的が達成されたことを意味しており、それはKR8Mの肯定的な自己評価につながっていると言えよう。

インタビュー断片11：

KR8M：(중략) 만약 내가 유창한 영어를 했다면 분명히 제가 거기서 내가 지금 이걸 안 샀지만 나는 여기서 분명히 이걸 살 수 있는 사람이고 같은 브랜드 때문에 이렇게 된 건데 너네가 직접책임은 없지만 불쌍하게 여길 수는 있지 않냐? 이런 식으로 설명을 하고 싶었는데 말이 안됐어요. 그래서 집에 가서 너무 억울하기도 하고. 썼어요 이렇게. 라이팅을 하고 신랑한테 이거 읽어보라고 했더니 굉장히 잘 썼다고 하더라구요. 말을 거기서는 못했는데 차분하게 생각하다 보니 되더라구요. 그렇게 해서 다시 돌려받았죠.

((中略)もし私が、英語がちゃんとできていたら、お店で直接購入はしていないが、いつか自分は同じブランドを購入することもできるので、お店の責任はないが、被害者の自分を可哀想に思い助けてくれてもいいのではないかと説明しようとしたが、うまくできなかった。それで家に帰ってからとても悔しくて、文章に書いた。それを夫に見せたら、褒められた。その場ではうまく話せなかったが、後でゆっくり考えると言いたいことがちゃんと書けた。それで返金してもらうことができた。)

## (2) ネットワーク形成と社会的位置付け

KR8Mは、自身がいかに英語の学習に熱心ではなかったかを振り返り、次のように語っている。

「今まで英語を避けていたのは切実さが足りなかったからだと思う。今までは夫に頼るところが多く、仕事のために英語が必要なこともなかった。」

さらに、KR8Mは「英語で話すときはとても消極的な人になる。韓国にいた頃はとても積極的な人だったのに」と話しており、ネットワークの参加が彼女自身の性格やアイデンティティにも影響をしていたことがうかがえる。KR8Mのように英語の問題がホスト社会でのインターアクション参加を抑制し、その結果、自身の社会的アイデンティティが変わってしまう話は英語移民に限る話ではない。日本に居住する外国人の調査でも類似する報告は多くあり、移住社会を問わず、言語問題がネットワーク参加や社会的アイデンティティにいかに関係しているかを示唆している。しかし、KR8Mのこうした社会ネットワーク参加は3年前の再渡豪をきっかけに変化が見られる。またそれには上記の断片11でのインターアクション管理や自己評価がきっかけとなっている。さらに、KR8Mは次の断片12のように「海外で移民として生活していると、時々悔しい思いをすることが多く、今まではそういう状況になると解決を避けてしまうことが多かったが、自分の状況を相手にしっかり説明できるようにしたい。」と話しており、英語に対する意識に変化があったことがうかがえる。

インタビュー断片12：

KR8M: (중략) 예를 들면은 억울한 일을 당했을 때가 많아요. 원가를 제대로 설명해야 하는데 그걸 하기 어려울 때 피해버리게 되더라고요. 그거를 맞닥뜨리는 게 귀찮고 하니까(중략). 한번 넘어보고 싶어요. 누군가 한명한테. 나를 기다려 줄 수 있겠나 내가 진짜 이렇게 말을 못하는데, 알아듣지 못하는데 충분히 기다릴 수 있겠나? 싶은 사람이 만약 있으면 몇 시간이고 그 사람하고 같이 얘기를 해서 이 장벽을 한 번 넘어보고 싶더라고요.

((中略)例えば、悔しい出来事があってもそれをうまく説明しなければならぬのにうまくできないうと避けてしまう。そのような状況に会うのが面倒くさいと思えて。(中略)。いつかは乗り越えてみたいです。誰か一人でも。誰か待ってくれる人がいれば、私がこんなに英語が話せなくても、聞き取れなくても十分に待ってくれるのか、そうしてくれる人が一人でもいたら、その人とずっと話してこの英語の壁を乗り越えてみたい。)

### (3) まとめ

以上、ここではKR5MとKR8Mのようにオーストラリアへ移住する前にすでに他の社会で居住した経験がある韓国人移民のケースを取り上げ、移住の経験が彼らの英語能力の自己評価にどのように関わっているかを分析してみた。移住の経験があるといってもその中身は人それぞれであるので、ある傾向を引き出すことは難しい。本調査ではランダム形式で8人の韓国人移民の言語レポーターと言語管理を調べており、うち4人の調査協力者は移住の経験がすでにある移民であった。彼らの多くは外国人居住者としてホスト社会に暮らした経験があることから、今のホスト社会では移民の位置付けに止まらず、積極的にホスト社会への言語を習得したり、社会参加のためのネットワーク作りやインターアクションを管理している(e.g. KR6M, KR8M)。中には、ホスト社会でのインターアクション問題を回避するために一時的に前のホスト社会の言語環境に近い環境に再就職し、自分のできる言語リソースから現在のホスト社会での言語問題を解決しようとした移民もいた(e.g. KR7M)。どちらの場合も以前の移住の経験は現在のホスト社会への参加に必要な言語または文化のリソースとして活用されていると言えよう。しかし、一方で、KR5Mのように自分を移民のアイデンティティの中に位置付けながらも、移住や接触経験をホスト社会へ近づくためのリソースとして利用するのではなく、社会と文化を問わず、通用できる自分なりの「標準」(共通語の意味として)を作り上げることに利用する移民もいる。つまり、多様な接触経験を言語リソースのように状況に合わせて使い分けることで

活用するよりは、自分の中の標準を作りあげる材料として使い、ホスト社会での様々なインターアクションや自身の社会的位置付けを管理しているとケースもあると言える。

## 5. 考察とまとめ-日本の移民の事例分析と比較して

ここでは、本研究の分析の枠組みとなり、すでに日本における移民の言語レパートリーの多様性を言語能力の自己評価と社会的ネットワーク参加から調べた村岡(2017)の結果と比較しながら、移民社会が成熟していると言われるオーストラリア社会と、まだ成熟の途中にあると言われる日本社会ではどのような移民による言語管理の違いや共通点が見られるかを考える。

### (1) 外国人居住者や移民の自己評価の多様性

村岡(2017:80)は外国人居住者の自己評価はその評価の種類や基準から見ると多様で、そこでは本人の接触経験の歴史やホスト社会との関係といった個人差を考慮すべきことを指摘している。今回調査協力者となったオーストラリアの韓国人移民の場合も同様に自己評価に多様性が見られた。評価の種類や基準において村岡で指摘しているように個々人の接触経験や言語能力(ホスト社会の主流言語)によって多様であることが確認できた。一方で、村岡の調査では取り上げていない評価の種類、例えば、否定的でもなく肯定的でもない「中立評価」や、同じ出来事でも調整によって否定的評価から肯定的評価に変わる「再評価」(e.g. KR1S, KR8M)も見られている。その際、評価の基準は一つではなく、複数の基準が重なり適用されることになっていると考えられる。

### (2) 通時的管理の軌道と社会的ネットワークへの参加

村岡(2017:80)は、自己評価の多様性の一部は、通時的な言語管理の軌道と社会的ネットワークへの参加の様態によって説明できると指摘している。その例として、総体的に肯定的な評価をする場合には日本語学習や日本語習得に対しても原則がよく語られるとしている。本調査でも同様の傾向が見られ、肯定的な評価が多かった移民や、否定的評価から肯定的な評価に自己評価の変化が見られた移民の場合は、英語の習得やホスト社会の参加に対する独自の原則や調整ストラテジーがよく語られていることが確認できた。一方で、移住の経験や接触経験が豊富な調査協力者の中には、他の調査協力者に比べ、言語能力に対する自己評価の語りが少ない人もいた。しかし、その代わりに、自身の接触経験からのホスト社会での言語使用や社会参加に対する原則がよく語られていることも分かった。これは単に接触経験が多様であるということではなく、どの移住社会でもすでに英語を中心とした生活が長く、英語を使用する通時的管理が蓄積されてきたことによってできた原則であると考えられる。ここには成熟した移民社会での「移民」としての新たな管理のあり方や方向性が示唆されたと言えよう。

### (3) 抑制された社会的位置付けと言語習得の機会

村岡(2017:80)では総体的な自己評価が否定的であると判断される場合には通時的な言語管理における原則が語られるよりも、アイデンティティをめぐる否定的な部分が強く意識されると指摘している。またこうした望ましくないアイデンティティは、結果として当事者の言語習得の機会が制限されることに繋がると述べている。オーストラリアの韓国人移民の場合、どの調査協力者も主流言語、つまり英語能力に対する自己意識は非常に強く、とくに、自己評価が低い移民の場合、ネットワーク作りやホスト社会への参加を回避したり、消極になるケースが日本の移民に比べ比較的に多いように思われる。それは制限されたネットワーク

や社会参加は結果として英語習得機会の制限に繋がり、さらに元の自分の性格や期待していたアイデンティティとは異なる方向に押し付けていることも分かった。またそれは最終的に移民が所属するホスト社会への否定的な評価にもつながっていることも分かった。

#### (4) 移住経験と言語レパートリーの管理

移民が所持している言語資本は社会的ネットワークへの参加において重要な資源となることはよく指摘されている。高(2016)、村岡(2017)では、日本の外国人居住者の中では英語を含む多言語を活用することで日本社会への参加が進んでいることを指摘している。しかし、移民による多言語使用者が多いオーストラリアの場合は、英語の他にできる言語があることはそれほどメリットではなく、多言語使用者であるだけで社会参加が進むことはあまりない。このような意識は実際調査協力者の語りからも見られている。オーストラリアの韓国人移民は、多言語話者であることよりも主流言語に対する能力がどのくらいなのかの方をより重視し、多言語話者としての管理は日本の多言語使用者と比べ顕著ではないことが分かった。それは移住や接触経験が多様な移民でも現在の社会での主流言語である英語能力が十分ではない場合は、それらの経験は移民の社会的参加を容易するリソースとして活用されないことが分かった。ただし、多様な言語コミュニティが存在している移民社会であるだけに移住の経験やそこでの言語習得の経験は、当事者の英語による言語問題や、それによる否定的な自己評価を調整する(言語問題を一時的に潜在化させ、言語能力に対する自信を取り戻し、社会的ネットワークへの再参加をサポートする)役割をしている事例も見られた。

## 6. 終わりに

本研究はオーストラリアにおける韓国人移民の言語レパートリーをめぐる言語管理を明らかにすることを目的とし、移住の背景や英語の習得の過程、現在の英語能力に対する自己評価を調べるとともに、そこで語られる移民の通時的管理がホスト社会での社会的ネットワークの参加にどのように影響しているかを分析・考察した。とくに、移住経験の有無がオーストラリアでの韓国人移民の言語レパートリーや言語管理の特徴を作り上げるのにどのように関わっているかにも注目し、その結果を村岡(2017)の日本の移民の調査の結果と比較・考察した。多文化社会への成熟度や共通言語意識の度合いが異なる二つの移民社会を比べることで、それぞれの社会の移民が抱える言語問題の特徴や言語レパートリーをめぐる管理の方向性が示唆されており、これについては今後さらにデータを増やし、追求していく必要があるだろう。

本調査は、JSPS 科学研究費基盤研究 C 「言語リソースの評価から見た移動する人々の言語レパートリーの変容に関する民族詩的研究(言語代表者：村岡英裕、課題番号 2670474、2014-2018)の助成を受けている。

**謝辞:**メルボン調査においては、倉田尚美(モナシユ大学)の協力を得ており、この場を借りて感謝します。また本調査に協力してくださった全ての調査協力者の方にもこの場を借りて感謝します。

## 参考文献

- Berry, J.W.(1997). Immigration, acculturation and adaptation. *Applied Psychology*. 46. pp. 5-68.
- Blommaert, J.(2010). *The Sociolinguistics of Globalization*. Cambridge : Cambridge University Press.
- Blommaert, J. and Backus, A (2013). Superdiverse repertoires and the individual, in I. de Saint-Georges and J. J. Weber (eds), *Multilingualism and Multimodality: Current Challenges for Educational Studies*, Rotterdam: Sense Publishers, pp.11-32.

- Jernudd, B.H. and Nestupny, J.V. (1987). Language planning: for whom? In Lafarge, L. (Ed.). *Proceedings of the International Colloquium on Language Planning*, May 25-29, 1986, pp.71-84. Ottawa. Les presses de la Universite Laval.
- Gumperz, J. J., & Hymes, D. (1972). *Directions in sociolinguistics: The ethnography of communication*. New York: Holt, Rinehart, & Winston.
- Gyungsook, Jane, Lee (2014). Perceptions of the English Language as a Labour Market Barrier : Korean Women in Australia, *Studies of Koreans Abroad*, 32, pp.207-258
- 高民定(2013). 言語教育における評価研究の課題と展望—接触場面における当事者評価と言語管理観点からの考察— 人文社会科学研究 27号 千葉大学大学院人文社会科学研究所 pp.180-191
- 高民定(2016). 日本の外国人移民の言語環境と言語管理—言語バイグラフィーの通時的・共時的語りの分析から— グローバル・コミュニケーション研究 神田外語大学 pp.169-196.
- 今千春(2012). 韓国人居住者の接触場面に向かう言語管理—言語バイオグラフィーからの記述の試み— 千葉大学大学院人文社会科学研究所プロジェクト報告書第292集 pp.49-67.
- 최은수(チェウンス)(1996). 재미 한인 이민자들의 사회부적응 실태와 정책적 대안이 갖는 통일과 교육에의 시사성, *교육사회학연구*, 6(2), pp.93-110.
- 村岡英裕(2002). 質問調査：インタビューとアンケート—言語研究の方法— 言語学・日本語学・日本語教育学に携わる人のために— くろしお出版 pp.125-142
- 村岡英裕(2010). 接触場面における習慣化された言語管理はどのように記述されるべきか：類型論的アプローチについて 千葉大学大学院人文社会科学研究所プロジェクト報告書第228集 pp.47-59.
- 村岡英裕(2017). 移動する人々の言語レパトリーに関する研究ノート—日本語の自己評価の語りはどのように構築されているか— 千葉大学大学院人文社会科学研究所プロジェクト報告書第309集 pp.62-80.
- 村岡英裕・倉田尚美(2017). 日豪における移動する人々の言語レパトリー調査—社会ネットワークへの参加の文脈に焦点を当てて— 第39回社会言語科学会研究大会予稿集 pp.66-99 社会言語科学会
- Muraoka, H., Fan, S.K. and Ko, M. (2013). Ethnographic analysis of evaluation diversity in language management: A Methodological consideration for the study of migrants in societies of early globalization. *3<sup>rd</sup> International Language Management Symposium*. Charles University, Prague, 13-14 September, 2013.
- Nekvapil(2003). Language biographies and the analysis of language situations: on the life of the German community in the Czech Republic. *International Journal of the Sociology of Language*, 162, pp.63-83.
- Norton, B. (2000). *Identity and language learning: Gender, ethnicity and educational change*, Harlow, UK: Pearson Educational/Longman.
- 오성희・박기환(オソンヒ・パクキファン) (2007). 이민자들의 심리적 건강에 영향을 미치는 요인들—한국계 호주 이민자들을 중심으로, *한국심리학회*, 21(4) pp.55-69
- 定松 文(2008). 移民と言語—人は移動するという前提から言語と社会をとらえる— ことばと社会 11 多言語社会研究会 pp.10-29
- テンジン, N.K. (1992). エピファニーの社会学—解釈的相互作用編の核心 関西現象学的社会学研究会 (編訳), マクロウヒル.

---

<sup>i</sup> 移民(migrant)の定義は各国の国際法などによって異なるが、植民地として開拓された歴史を有するアメリカやカナダ、オーストラリアなどのような国は出生地主義と二重国籍を認めており、移動してきた人々に対して「移民」を用いる(定松(2008:7)。

<sup>ii</sup> 詳しくは「Australian Bureau of Statistics」(<http://www.abs.gov.au>)を参照されたい。2011年から2016年の5年間オーストラリアに定住した移民は130万人で、その大半はアジアの出身者となっている。

<sup>iii</sup> 詳しくは『호주 한인 50 년사』(オーストラリアの韓人 50年史) 호주한인 50년 편찬위원회편(オーストラリアの韓人 50年編集委員会)(2008)を参照されたい。